《特集》 ― 私の趣味 ―

テニスと私

（９組） 大橋　元司

私は「ソフトテニス」（以前は軟式テニスと呼ばれていた）に、中学時代より取り組んでおり、趣味と言うより生活といったほうがよいかもしれない。

高校一年までは楽しむスポーツであったが、ある人との出合いにより、「どうせやるならうまくなれ」と云われ、勝負の世界に入った。

全国高等学校総合体育大会（インターハイ）３位を皮切りに「いつか全国大会優勝」を夢に、その当時日本一だった日本体育大学へ進学した。そして職業もソフトテニスに携われるものとして高校教師を選び、現在高校生の部活動の監督としてソフトテニスを指導している。早朝練習、さらに午後16時より20時までの練習、大会や合宿でよく家を空けるなど、家族には大変迷惑をかけているのも事実である。

もし自分がソフトテニスをやっていなければ、今頃何をやっていたのだろうか。「サラリーマンかな、自営業かな」、とても想像がつかない。厳しい合宿生活、ものすごくプレッシャーを感じたアジア大会参加など、振りかえればとても貴重な経験が多かったと思う。また、そればかりか、自分の夢に、自分なりに懸命に取り組んでおれば、人生（少し大袈裟かもしれないが）を左右する、かけがえのない友人や知人との出合いがあることも教えられたと思う。

世間的にソフトテニスは、あまり知られることがなく、マスコミにも取り上げられることも少ないが、幼い頃から自分にとってはかけがえのないものであった。

「いつかは日本一に」という夢に向かってテニス生活二十数年、いろいろなタイトルを獲得できたが、「せっかくここまでたどりついた。もうやめられないぞ」と「今度は指導者として全国制覇」を、新な夢として「かみさんごめんなさい」と少しは思いながら、生徒と一緒にテニスコートで大きな声で、元気よく走り回っております。

植田孟彦氏（８組）、和気健氏（４組）、田中建治氏（９組）、和気章一氏（３組）より、香典返しとして町内会へそれぞれ金一封を戴きましたので、ご披露致します。心から厚くお礼を申し上げます。

旅行と私

（４組）原　博志

私の趣味と言えば、還暦を過ぎた今、水墨画、歴史探訪、社交ダンスと旅行である。

私は以前詩吟を習っていた頃から歴史に興味を持ち、２年前に県のメロウ学院で歴史の講座があったので早速申し込んだ。毎月１回県内の史跡、古墳、神社仏閣、美術館などを訪ね、講師の解説や資料などで、実に楽しく各地を回って見聞を広めることができた。特に印象に残った所は、吉備路、閑谷学校など個人でも団体でも、日ごろ拝観できない所が拝観でき、私たち郷土にも素晴らしい所があることを、改めて認識した２年間でした。

私は旅行が好きで、地図と旅の本を手によく出掛ける。車での旅は時間を余り気にしないで見所があればゆっくりできるのでよい。

７月に県の第２回吟剣詩舞友好訪中団（４０名）に参加した。上海・蘇州・寒山寺を径て、無錫・広州・桂林など１週間の旅でした。無錫での記念講演、楽しかった交流夕食会、大湖遊覧などよい思い出を残すことができた。無錫や上海は人や自転車の洪水で、道路は大混雑である。

交通の優先順位は勇気が最優先するそうだ。上海の街は高層ビルが次々と建っており、活気に溢れていた。道行く人は実にスリムな体をしており、太っている人はあまりいない。又広州では、子豚の丸焼きの珍味ホテルは最高の五つ星でした。一度訪ねて見たかった桂林では、雄大な離江下りをし、墨絵の中に吸い込まれるような風景を満喫することができた。都会の賑やかさとは対照的に田舎は実にのどかで、農家の庭先には鶏、豚、川には家鴨などが泳いでいる風景だ。

海外旅行は団体に限る。中国も最近は治安が悪く、トイレへ行く時は一か所に荷物を置いてみんなで見張る。トイレで思い出したが、前回廬山へ行った時トイレが全く無く、バスがある会社に止まってトイレを借りた。驚いたことに境も戸も何も無い。特に女性は大変だったと思う。

旅行の楽しみは、私は３つあると思う。第一は旅の準備、旅先の空想第二は現地の観光、第三は帰ってから写真、ビデオ撮影のテープの編集ダビングなどである。

趣味には夢があり、人との出合いとお互いの交流があり、仲間が多くできる喜びがある。

私の趣味「魚釣り」

（８組） 杉山 三郎

俳聖芭蕉は「月日は百代の（はくだい）の過客にして、行き交う人も又旅人なり……」と書いている。私は、少年の頃はトンボ捕り、七夕祭り笹竹の枝を払い竿に仕立て、ミミズを餌に鮒釣りをし、川魚を釣っては焼いて醤油をタレに食べたものだ。

時は流れ、磯釣り鮒釣りにも凝ったこともあったが、なんと言っても“鮎釣り”に勝るものはないと思っている。現在旭川を中心に行動しているが、６月の解禁が待遠しい。シーズン到来ともなれば夜中に度々目が覚め、夢の中で既に川に入っている。冬から春にかけて大量の鈎を巻きシーズンに備える。

最近は道具が良くなり竿も９～10mと長く、軽くなっている。糸は極めて細く髪の毛の数分の一となり、しかも非常に強い。クーラーに保冷剤を入れ弁当、お茶、飲物を用意して釣り道具を積み出発する。何時もの瀬に行き、先ず友釣りの親を獲る。これが早く獲れるかどうかで釣果に影響する。気の早い人は暗い内から来ている。本当に馬鹿が多い。

顔見知りと挨拶を交し、去年のこと、今年の見通し、お互いの無事等楽しい話をする。

良い鮎が獲れると友釣り専用の竿に替え、鼻環を通し尻尾より少し長めに鈎を出し「頑張って来い」と上てに送る。勢い良く潜って沖へ上流へと泳ぐ。流れの良い場所へ導いて暫く待つ。ググーと手応えがあり、竿を立てる胸がドッドッと高鳴る。手許に引寄せ手網（タモ）に捕り込みホッとする。その間のやり取りがスリリングで非常に楽しい。

初期を過ぎ、中期の７月ともなると体長は20cmオーバーとなり、引きの強さが増す。８月に入ると水も減り鮎も少なくなるが、一段と大きくなり釣りも難しくなる。25cm以上になると竿が弓形（ゆみなり）となり、糸はギューギューと鳴る。指で弾けばピーンと音がしそうだ。タモに捕り込みホット一息つき辺りを見る。この時の顔は緊張が解け、頬は緩み放し、本当にだらしない顔だろう。９月になると巨大なのがいる。

今年こそ30cmオーバーをと、毎年願うのだが、未だ実現はしていない。これはチヌの50cmに匹敵する。

趣味は人生の薬味だと思う。一週間一生懸命働き、頭を空にする。自然に溶け込み静かにしていると、上流ではカジカが鳴き、中流域では鶯が鳴く。実に心が豊かになる。「皆さんどんな趣味であれ、心身が打込めるものであれば良いと思いますが、如何ですか」